

## 新川達郎教授のご退職を記念して

真山 達志

同志社大学政策学部・総合政策科学研究科教授の新川達郎先生におかれましては、2021年3月31日をもって70歳の定年によりご退職されます。22年の長きにわたって同志社大学の研究教育の発展に貢献されてきました。そのうち6年間は総合政策科学研究科長を務められ、研究科の拡充にご尽力されました。その間、私も同僚の1人として御一緒させていただいたことを光榮に思います。2004年に政策学部を新設するに当たっては、若輩の私が設置準備委員長を拝命したのですが、関連の深い研究科の科長として委員に参画いただいた新川先生からは様々なご教示やご支援をいただきました。今なお感謝の念に堪えません。

私の新川先生とのお付き合いは40年近くになります。その昔、東京で行政学を研究している助手、研究員、あるいは大学院後期課程院生などが集まった研究会がありました。当時、東京市政調査会(現在の後藤・安田記念東京都市研究所)の研究員であった新川先生のご厚意で、日比谷公会堂にある同調査会の会議室を会場にしていました。研究会が終わると毎回のようには杯を酌み交わしていました。新川先生は誰しものが認める酒豪で、どれだけ飲んでも酔ったふうには見えませんでした。箱根、那須、あるいは外房などへ研究合宿に出かけたこともあり、楽しい思い出に溢れています。もっとも、若手研究者の自主的な集まりですから、研究会の場では口角泡を飛ばすような議論が起こることもありますが、新川先生はいつも冷静に議論を整理し、最後のまとめ役をされていました。研究関心が広く、様々な研究動向に目配せをされていることがなせる技だと敬服したものです。

実際、新川先生の研究テーマの幅は広く、地方自治、政策決定、行政計画、市民参加、ガバナンス、NPO、ソーシャル・イノベーションなど多岐にわたります。その中でも地方自治・地方行政に対しては一貫して関心を寄せられており、新川先生の研究の基本は地方自治にあると私は考えています。協働やパートナーシップ概念に早くから注目しておられたことから、地方自治との関わりでも関心を集めるようになったガバナンス論についても、2000年前後から多くの論攷を発表され、学界でのガバナンスに関する議論をリードされてきました。地方におけるガバナンスを検討する際に、市民、行政と並んで重要な役割を果たす議会に対する研究も積極的に展開され、地方議会の活性化に向けた改革に対して、論文執筆にとどまらず、議員に対する講演や研修にも尽力されています。

2000年以降の新川先生の研究におけるキーワードとして忘れることができないものがNPOです。90年代半ばからボランティアについての研究関心をお持ちだったと思いますが、それが発展してNPOに関する研究の展開となっています。そもそもNPOとは何かという基本的概念や理念から始まり、NPOと法や行政との関係、組織や法人としてのNPOの編成と運営などに至るまで、NPOに関する新川先生の論攷は質・量ともに充実しています。単に学術的研究対象としてNPOに向き合うだけでなく、多くのNPOの理事を務められるなど、実践の面でも活躍されており、この分野で新川先生のお名前を知らない者はいないと言っても過言ではありません。

これらの研究テーマ以外にも、日本では研究者が少ないイタリアの政治・行政や、近年では消費者政策にも関心を寄せておられます。このように多様なテーマを扱うと、凡人ではどのテーマも手薄になってしまうくらいがあるのですが、新川先生の場合はそれぞれのテーマにおいて学界をリードするような輝かしい研究業績を残してこられました。その結果、共編著書は 50 冊を超え、主要な学術論文は 100 本以上を数えます。しかも、研究活動は学界で高い評価を得ており、そのことは日本公共政策学会会長や日本計画行政学会副会長など多くの学会の要職を務められたことに表れています。

新川先生の特徴は、上述の NPO 活動にとどまらず、広く様々な社会貢献活動にも積極的に携わっておられる点です。一般社団法人地域公共人材開発機構理事長、公益財団法人京都地域創造基金理事長、内閣府消費者委員会委員など、現職（2020 年 10 月時点）だけでも 15 の公職に就かれており、多くの市民活動、公益法人や NPO 等の活動を支えておられます。

新川先生のご活躍を拝見していると、行政学者には色々な社会事象に研究関心を持つ必要があることや、研究室に閉じこもって研究するのではなく、地域社会や国・地方政府での活動を通じた研究が求められていることを実感させられます。行政学はもとより、社会科学は社会を研究対象にしているものの、社会に対して研究成果で貢献することはなかなか難しいと言えます。行政学が社会的レリバンシー（relevancy）を確保しようとするなら、すなわち行政学が社会との間に適切かつ妥当な関係を築こうとするなら、新川先生のこれまでの研究や社会活動が大いに参考になると思います。私などは新川先生の足下にも及びませんが、良き先輩として見習わなければならぬと思いつけてきました。

新川先生は定年で同志社大学を退職こそされますが、学界も社会も新川先生を必要とするときには変わりありません。ますますご活躍くださいますようお願い申し上げる次第です。